日本道徳教育学会会報

第76号
発行日　2023(令5)年4月25日
発　行　日本道徳教育学会広報委員会
住　所　〒202-8585
東京都西東京市新町1-1-20
武蔵野大学貝塚研究室内

憎しみは人格を破壊する
―憎しみを乗り越える道徳性の育成を―

名誉会長　押谷　由夫

ロシアのウクライナ軍事侵攻が一年以上続いています。そのような中、NHKスペシャルで「キーウ子どもたちの冬」が放送されました。昨年（二〇二二年）の九月に学校が再開された後の、四か月にわたる取材を基にした番組でした。

戦争の中での先生方の問いかけ
―憎しみをいかに乗り越えるか―

様々な戦争体験をしてきた子どもたちは、異口同音にロシアへの憎しみを口にします。先生方は悩みます。校長は、きっぱりと「憎しみは人格を破壊する。子どもたちと一緒に戦争について話し合ってみましょう」と提案し、各クラスで戦争について話し合う授業が展開されていきます。

一〇学年クラスのイオール君は、尊敬する軍人のお父さんが重傷を負ったことから、「軍人になって占領者と戦う義務がある」と主張します。先生はその意見を受け入れながらも、「どうすれば許す強さを手に入れられるだろうか」と問いかけます。

母が父の所に行く機会をとらえて、テレビ会話で父と話します。父は「子どもたちに戦争を見せたくないから戦っている」と言います。イオール君の心に徐々に変化が現れます。そして、冬休み後の授業では、「憎しみだけではなく、希望を見つけられるようにしたいです」と話します。

教師の役割と道徳教育の大切さ

戦争のさなかでも、先生方は、子どもたちの未来と国の将来を考えています。学校は、未来を創っていく子どもたちを育てるところです。よりよい自分、よりよい社会をどのようにイメージし共有化していくか。そのためには、憎しみを乗り越える力が必要だととらえます。憎しみを持ち続ければ、不幸な出来事を平気で繰り返すことになります。それは、人格を破壊している姿そのものです。

人格の基盤が道徳性であるといわれます。人格をもち続け、人間として成長していくには、道徳性を磨いていくことが不可欠なのです。その道徳性をはぐくんでいくのが道徳教育です。

未来を愛と希望をもって切り拓く子どもたちを育てる

日本は、ウクライナとは違います。しかし、いじめや問題行動が依然として深刻な状況にあります。相手に対する不快の感情や憎しみが子どもたちの間に潜在しているのではないかと考えられます。

腹が立つ、許せないと思う相手に対して、相手の立場に立って考えることは簡単にはできません。相手への憎悪を強める場合もあります。そのことを踏まえずに、思いやりの心や生命尊重の心を育てようとしても、砂上の城郭に終わってしまいます。

道徳の授業は、子どもたちの心に響く授業が大切です。それは、心の内の対話が起こる授業です。教材や先生の問いかけ、友達の発言などを基に、子どもの内面にある素直な気持ちや考えを出し合い交流します。それは多様ですが、そのうえで、互いをリスペクトし、協働してよりよい社会を創っていくという目標を共有し、変化する社会の中でいかに課題を乗り越えていくかを道徳的価値の側面から追求します。それは、「特別の教科　道徳」を要に、全教育活動を通して行う必要があります。

そのことを基盤として、未来を愛と希望をもって切り拓いていく子どもたちを育てるのが、令和の日本型道徳教育であるといえます。

（武庫川女子大学）

道徳教育を支えてきた名著　1

『ニコマコス倫理学』
アリストテレス

『ニコマコス倫理学』は、カントの『人倫の形而上学の基礎づけ』と並んで、西洋倫理学の最大の古典であり、同時に道徳教育の最高の古典です。

一　人間の本質をめぐる探究

道徳法則を打ち立てる実践理性を強調するカントに比べると、アリストテレスは道徳教育における習慣形成を重視していることと、道徳的判断において理性だけでなく感情を重視していることが特徴です。

人間の本質である理性の陶冶を重視するか、それとも習慣形成としての道徳教育を重視するかによって、アリストテレスの立場は普遍主義と特殊主義的な共同体主義（コミュニタリアニズム）との双方に影響を与えてきました。では、どうして2つの異なる立場や解釈が生まれるのでしょうか。

解釈の対立が生じるのは、マッキンタイアが『美徳なき時代』（みすず書房）で述べているように、アリストテレスの形而上学的な人間観と政治学的な人間観の間に緊張があるからです。前者については、人間は理性をもつがゆえに動物や植物とは異なるという人間観があります。この立場を代表する現代の著書として、ヌスバウムの『女性と人間開発』

（岩波書店）が挙げられます。後者については、「人間はポリス的（政治的）動物である」というアリストテレスの『政治学』の命題に依拠しながら、特定の共同体（つまり国）の文化や伝統を共有することを重視します。その場合、道徳教育は、諸々の徳を含む特定の共同体の文化や伝統を教えることと見なされますので、習慣形成としての道徳教育が重視されます。

二　実践的推論

上記のどちらの立場に立つにしても、アリストテレスを道徳教育に活かす上で重要なのは、「実践的三段論法」として知られる実践的推論をめぐる議論でしょう。人間が実践的推論(reasoning)を行うことができるのは、人間には理性(reason)があるからだということを確認しておくことは重要です。実践的推論は、たとえば以下のような形を取ります。

大前提:人は幸福を求めている。
小前提:人は幸福になるために、他者からの親切を必要とする。
結　論:人は他者からの親切を求めている。

大前提:困っている人には親切にすべきである。
小前提:この人は困っている。
結　論:この人には親切にすべきである。

道徳教育と道徳授業の一つの目標は、子どもたちがこうした実践的推論を行うことができるようにすることだと言えます。なお、アリストテレスにとって、人生の目的は幸福（エウダイモニア）になることです。そこで、道徳の内容項目が幸福という目的によって正当化されるかどうかを私たちが考えてみることが大切だと言えるかもしれません。

三　友愛

アリストテレスによれば、「人間はポリス的動物である」という命題が正しいと言えるのは、人間は、自足している神でもなければ、他者と協力できない獣でもないからです。だからこそ、人は他者と協力し合い、支え合うために家族や国などの共同体を形成するのです。和辻哲郎の「間柄」の倫理学がこの点に注目し、倫理学と政治学は一つであると論じたのはそのためです（『人間の学としての倫理学』岩波文庫）。それゆえ、アリストテレスにとって、「友愛（友情）」こそが最も重要な徳（私たちが言う道徳的価値）の一つです。有徳な人物が友愛を必要とするのは、他者から助けてもらうためではなく、他者を助けることで自分の徳を示すことができるからだとアリストテレスは言います。「徳の友（お互いの善を求め合う友達）」「有用性の友（お互いに利用し合う友達）」「快楽の友（一緒にいて楽しい友達）」という三種類の友情は、道徳授業の教材分析にも活用できるでしょう。

『ニコマコス倫理学』は、「道徳・倫理とは何か」をめぐる道徳教育の基礎理論、「道徳の内容項目をいかに正当化できるのか」という実践的推論の理論、そして道徳科の授業理論として、最重要かつ最先端の知見を提供してくれるのです。

（大阪体育大学　髙宮 正貴）

会員の声（私と学会）

現場の教師に光が当たる場であることを願って

木原 一彰

私が本学会に会員として加入させていただいてから、二十年あまりの年月が過ぎました。その間、現場の一担任教師として、いくつもの得難い経験をさせていただきました。

初めて学会で自由研究発表に取り組んだのが、二〇〇八年に岐阜大学において開催された第七十一回大会でした。大きな舞台への期待と緊張感を抱いて臨みましたが、直面したのは厳しい現実でした。前の発表者の時には満席だった講義室が、私の発表の時には五名にまで減っていたのです。今思えば、実績も何もない者の実践報告でしたので、当然の状況でした。不甲斐なさと悔しさを胸に抱きつつも、「いつか、多くの方々に話を聞いてもらえるような実践家になりたい」と、自らを奮い立たせたことを、今でもはっきりと覚えています。

小・中学校現場の教員からすると、学会という場はとてもハードルが高く感じられるものです。校内研究や諸団体が主催する教育研究論文等と比べ、より質の高い研究が求められることが、その要因のひとつであろうと思います。

しかし、他の教科・領域と同様に、道徳教育及び道徳科においても、教育理念や理論だけでなく、それらに根ざした教育現場での実践の双方が往還することが重要なのは言を俟ちません。研究者の方々と児童生徒に向き合う教師とがつながるために、学会は貴重な場であると考えます。

私自身も、学会に参加する中で、多くの研究者の方と出会う機会を得ました。私の実践研究の至らない部分をご指摘いただいたり、拙い実践の中にも何かしらの意味を見出して価値づけていただいたりするなかで、道徳教育に関する知識の深まりと次の実践に向けての新たな気付きを得ることができました。

この数年間のコロナ禍で、直接対面しての研究会が開催できなくなる一方で、オンラインを通したつながりの場が広がってきました。その結果、これまで書籍や論文等でしか出会えなかった方々はもちろん、全国で試行錯誤しながら授業に取り組んでいる若手や中堅の教師たちの実践に学ぶ機会も増えました。

本学会も、近年オンラインでの開催を実施したことで、現場の教師が参加するハードルは確実に低くなったと感じています。そして、自らの実践を世に問う場のひとつとして、学会の自由研究発表やラウンドテーブルにエントリーすることも増えてきたように思います。

現場で日々子どもたちと向き合い、試行錯誤しながら実践に励んでいる優れた若手や中堅たちが数多くいます。そういった方々に、厳しくも温かい光が当たる場として、これからも学会が機能していくことを願っています。

（鳥取市立大正小学校）

学会支部の活動の紹介

北海道支部

北海道支部では、対面とオンラインのハイブリッド学習会を開催し、研究を推進しています。

■令和4年度第3回学習会（8月）

第3回学習会は、東北支部とコラボで行いました。「道徳科授業づくりQ&A」では、両支部のメンバーが登壇しました。

また、第99回大会で自由研究発表を行った支部メンバー真壁佑輔氏（札幌市立中学校）から「ローテーション道徳について」の実践報告と、安井政樹（札幌国際大学）による道徳科におけるICT活用研修も実施しました。参加者が実際にアプリを活用して、自分の思いを端末で見える化したり、思考ツールを活用した協働学習を体験したりしました。活用のためには、まず慣れることから始める重要性を確認しました。

第３回学習会の様子

■令和4年度第4回学習会（10月）

元文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官浅見哲也先生をお招きし、学習会を開催しました。「令和の日本型学校教育における道徳科の授業実践」という演題でご講演をいただきました。後半のパネルディスカッションでは、北海道の小学校と中学校で進めている道徳教育の実践報告をもとに、これからの時代の道徳教育を考えました。実践報告は、根岸良久氏（札幌市立小学校）、奥山裕太氏（札幌市立中学校）が行いました。各学校の課題をもとに、道徳教育推進教師を中心とした道徳教育の改善に向けて取り組むことの大切さを確認しました。

第４回学習会の様子

■令和4年度第5回学習会（2月）

第100回大会で自由研究発表を行った支部メンバーの浅部航太氏（元北海道立教育研究所主任研究研修主事）が「道徳科教育研究における質的研究の在り方に関する一考察」を、安井政樹が「内容項目を窓口とした道徳科における個別最適な学び」についての発表をし、さらに議論をしました。北海道支部ではこのように、定期的に学習会を開催しております。ホームページも刷新し、セミナーなどの情報提供を行っております。全国の皆様のご参加をお待ちしています。（安井 政樹）

東北支部

令和4年5月に発足した東北支部は、本年度、5回の学習会を開催しました。1回目は5月15日に支部立ち上げ記念として、日本道徳教育学会会長の永田繁雄先生より「次世代につなぐ道徳教育と道徳科の指導～東北支部の立ち上げに期待を込めて～」を演題にご講演をいただきました。

第2回は、8月10日に北海道支部とのコラボ企画にて開催しました。北海道支部の安井政樹先生、浅部航太先生、東北支部より佐々木篤史先生、山田の4人が講師となり、「道徳科授業づくりQ&A」と題して、参加者からの疑問や悩みに応える形の学習会となりました。教材研究の視点や、授業を点から線として考えていくこと、道徳科における深い学びなど、多くのご質問から参加者全員で考えるよい時間となりました。理事の佐々木哲哉先生からの「お互いが一つずつ持っているリンゴを交換しても、手元にはリンゴは一つしかないが、アイデアは一つずつ交換すると倍になる」と温かい閉会の言葉で締めくくりました。

第3回は、11月11日に行われた東北地区小学校道徳教育研究大会山形大会への参加となりました。

第4回は12月23日に年末学習会として、理事の渡邉真魚先生からの話題提供をもとに、一年間の道徳科授業を会員相互に振り返ったりコメントし合ったりと、充実したクリスマス前の学習会となりました。渡邉先生からは、道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた実践や、校内研究の様子などから大変示唆に富むお話を伺うことができました。

そして、第5回は1月24日に岩手県道徳教育研究会とのタイアップ企画で対面とオンラインのハイブリッド開催となりました。岩手大学教育学部附属小学校の堀籠謙友先生、同中学校の鈴木駿先生が授業を公開されました。授業研究会の後には、元文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の浅見哲也先生から「道徳科の授業の充実を図るために」と題してご講演をいただきました。それらの様子を、オンラインで同時配信をして、東北支部の会員および岩手県内遠隔地の先生方にもご覧いただきました。新たな取り組みではありましたが、機器の不具合等もなく、大変好評でした。

まだ、発足して間もない東北支部ですので、これから更なる挑戦を重ね、道徳教育、道徳科授業の充実につながるよう東北支部一丸となって努力していきます。

第5回学習会の様子

（山田 将之）

※新潟支部は、別の機会に活動を報告していただく予定です。

神奈川支部

私ども神奈川支部は、令和４年度に創設10周年を迎えました。その記念すべき1年間の支部活動では、様々な事業に例年以上に傾注して取り組んできました。例えば、道徳フォーラムや会員研修会、支部研究大会等はオンラインながらも、日本道徳教育学会理事や会員の皆様のご助力を得て盛大に開催することができました。これもひとえにシンポジストや研究提案者等の役割を快く引き受けてくださった学会理事・会員の皆様のお陰と心より感謝申し上げる次第です。

また、記念刊行物についても創意ある取組を推進できました。まず、支部会員の研究成果や年次活動の全貌をくまなく網羅してアーカイブ機能も果たしている支部研究紀要『道標』第10号では、年間４回開催する学習会や紀要編集委員会を束ねる研究推進委員会、様々な支部催事を企画する企画委員会、ホームページ管理や様々な催事情報発信および支部広報誌等の取りまとめを担う広報委員会、支部活動に係る全て業務の取りまとめ役である総務委員会といった専門委員会だけでなく、支部活動を束ねる要でもある事務局の過去10年間の足跡を特別企画として編集・掲載しました。

その他に支部の若手会員を中心に17人で立ち上げた自主研究グループが、ほぼ1年間の時間を費やして東洋館出版社より『道徳科授業づくりオムニバス』（四六版207頁）を12月に刊行し、教育関係者の間で話題となりました。こんな心沸き立つ出来事が満載となった、記念すべき令和４年度でありました。

さて、令和5年度の神奈川支部活動は前年同様に４月の道徳フォーラム、８月の会員研修会、12月の支部研究大会、年間４回の定例学習会（６月・９月・11月・２月）、年度末刊行の支部研究紀要『道標』編集、折々の支部活動を取りまとめて外部に発信する広報誌『神奈川の道徳』の刊行、支部ＨＰでの様々な情報公開等を例年通り積極的に進めていく予定です。支部ＨＰをご覧頂ければ、通年的な取組が全て網羅されておりますので、是非とも定期閲覧をお願い致します。

紙幅も少なくなったのですが、神奈川支部の最大の魅力を最後にお伝えしたいと思います。これは一連の新型コロナ感染症拡大という試練の中での怪我の功名でもあるのですが、本支部には神奈川県周辺に住んではいないが支部創設趣旨に賛同してオンライン参加されている遠隔地会員が多数おられます。様々な催事では、対面参加者同様にオンラインを介して活動を共にしています。また、研究発表をされたり、研究紀要に投稿されたりと会員資格特典の行使は全て同一です。これからのＤＸ時代にも、積極的に活動展開を推進する神奈川支部です。多くの皆様のご参加・ご入会を心よりお待ち申しております。

（田沼　茂紀）

愛知支部

本年度、以下の活動を行いました。

■5月21日（土）参加28名

【総会】
・令和元年～3年度
　活動報告・会計決算報告
・令和４年度
　役員・予算案・活動計画の承認

【研修会】
主題「道徳教育の現状について」

【概要】
コロナ禍の中、小中学校学校現場でどのように道徳教育が展開されているのか、情報交換しました。道徳教育が停滞しているのではないかとの意見が多く出されました。

■9月24日（土）参加17名

【研修会】
主題「教材を見つめなおす」
～お勧めの教材、
　取り扱いづらい教材～

【概要】
これまで取り扱ってきた教材と教科書の教材との違いを見つめるとともに、どのように向き合うべきかについて意見交換しました。それぞれの教材には長短があるが、短所にだけに目を向けることなく、教材理解を深めるように努め、児童生徒の内面を育む授業の展開が重要であることが確認されました。

■12月3日（土）参加51名

【講演会】
演題「道徳の授業の話をしませんか」
講師　愛知学泉大学教授
　　前田 治 先生

【概要】
児童生徒の心に響くような教育を展開したい。型に縛られることなく、心情を育むことを大切にしたい。特に授業以外の場面での児童生徒への働きかけを大切にしたい。そうした前田先生のお話に、児童生徒の内面や授業中の発言内容としっかりと向き合うことの大切さを改めて確認することができました。

■2月11日（土）参加24名

【研修会（実践発表）】
○増田千晴 先生（犬山中学校）
主題「教師同士が協働する道徳授業―道徳推進教師が支援すること―」
○北川沙織 先生（小坂小学校）
主題「役割演技を通して考える道徳授業―よく観て、そしてよく考える授業展開を取り入れることの効果について―」

【概要】
発表内容はそれぞれの先生の個性を生かしたものでした。道徳教育に真摯に向き合う2名の先生のお話に刺激を受けた会員の姿を多く見ることができました。こうした実践の積み重ねや広がりが、道徳教育の充実には欠かせないことを、改めて感じることができました。

（権田　昭）

近畿支部

近畿支部活動テーマ

「子どもたちがよりよい生き方についての考えを深める道徳授業の在り方
～道徳教育の本質を問いながら～」

■支部総会及び第40回学習会

（5月21日、会場：堺市産業振興センター、19名参加）

支部総会において、年間活動計画等が承認された後、学習会を開きました。

①研究発表（塩家崇生会員）「道徳科における端末活用授業と非活用授業の比較研究から見えたこと」②活動報告（由良健一会員）「道徳授業を広げ、深める研修会について尼崎市学びの先進研究サポート事業（自主研究グループ）での活動報告」③これからの近畿支部の活動を考える（杉中支部長）

■第41回学習会

（8月28日、会場：サンスクエア堺、19名参加）

①研究発表（淀澤勝治会員）「道徳教材に人物（偉人）を取り扱う意義と課題に関する一考察」②実践発表（松原弘会員）「偉人伝なんか怖くない～『人間の魅力』からねらいに迫り深く考える～」③授業創り講座（川崎雅也会員）「偉人伝」攻略法「日本植物分類学の父・牧野富太郎」

■第42回学習会

（11月5日　会場：サンスクエア堺、22名参加）

①研究発表（藤井裕喜会員）「心に響く自作資料を創る」②研究発表（由良健一会員）「子どものおたずねを軸とした道徳科授業～事前学習を基にして～」③授業創り講座（川崎雅也会員）「感動・畏敬の念」攻略法「木の声を聞く」「命の木」

■学会研究委員会

道徳科「授業づくり」セミナー共催（12月10日43名参加）

①研究発表（淀澤勝治会員）②実践発表（松原弘会員）

■第10回道徳セミナー

（2月11日　会場：四天王寺大学　対面151名・オンライン35名参加）

テーマ：道徳科における「深い学び」を実現する授業とは？
～中学校道徳科教材「二通の手紙」を題材に～

①授業者：川崎雅也（大阪）・磯部一雄（北海道）・曽根原和明（東京）②コメンテーター：高宮正貴（大阪体育大）・杉中康平（四天王寺大）・西野真由美（国立教育政策研究所）③討議会コーディネーター：島恒生（畿央大）④講演（原作者）：白木みどり（金沢工業大）

■近畿支部同人研究誌『道徳教育研究』第8号発行

年度末の3月には、近畿支部の一年間の研究の成果を世に問う、近畿支部同人研究誌『道徳教育研究・第8号』が発行されました。研究論文、実践報告、顧問雑感、支部の活動報告などを掲載しています。今後も子どもたちへのより深い学びになる授業を目指し活動を続けていきます。

（松原 弘）

岡山支部

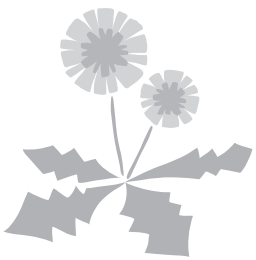
岡山支部は、2020（令和2）年2月に開催した第131回定例研究会以来、活動を休止している。それまでは、1993年に前身の「岡山県中学校道徳教育研究会」として活動を開始して以降、隆替はあったが、研究会を30年近く定期的に開催してきた。ところが直近の3年間は活動休止を余儀なくされているのである。

直接の理由はコロナ禍にある。だがコロナ禍がなくても、常連参加者の引退や参加者の不定着などにより参加者が激減して休止寸前であった。支部世話人の筆者と少数の常連は最後の一人になっても活動を継続するつもりではいるが、このままでは早晩支部の閉鎖になりかねない。それを回避して安定した支部活動を継続するためにはどうすればよいか。そのための方策は岡山支部の今後の活動方針となろう。そこで、それを示唆することにより支部の活動報告に替えさせていただきたい。

活動休止前の数年間、岡山支部の研究会では教員退職者によって学校経営の回顧や自身の教育観の開陳など、いわば学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について語られることが多かった。それらは興味深かったが、それらの回に初めて参加した参加者がその後の活動に定着することはなかった。一方、道徳教育関係の行事で参加者が多いのは「授業の方法」に関わる会合である。岡山支部でも授業方法についての研究発表や模擬授業がよく行われていた頃は盛況であった。両者の違いは何を意味しているのだろうか。

E・F・バークレイによれば、人が学習などの課題に注ぐ努力は、課題それ自体にどのくらいの価値をおくかという「評価」と、その課題をどの程度うまくやり遂げられるかという「期待」との産物であるという。ならば参加の難易度が研究会間で大差ないとすれば、参加者が多い「授業方法についての研究会」の方が「教育活動全体を通じての道徳教育についての研究会」よりも価値ありとみなされていることになる。むろん一概には比較できないし、教育活動全体を通じての道徳教育が否定されているわけでもない。しかし現状からは多くの人が「明日の授業をいかに行うか」にどれほど悩んでいるかが浮かんでくる。何を研究するかは自由であるが、強いてテーマを定めて取り組むこともできる。協働して社会的要請に応えることが支部には求められているのかもしれない。

（秋山 博正）



鳥取支部

本支部が開催している鳥取県道徳教育研究大会（第33回）は県版コロナ警報のため、大会直前にやむなく中止としました。

3年連続の中止ですが、会員の研修機会の確保と会員増を期して、令和5年2月に会員外にも案内して研修会を開催しました。大会で予定していた公開授業（ビデオ公開）を視聴し、人物教材の授業づくりについての授業検討会を実施しました。

今回は、八頭町立船岡小学校の杉谷義和先生の授業をもとに行いました。郷土の偉人を取り上げた総合単元的な取組でした。事前に教材を配付したり、児童の疑問を発問に取り入れたりして、児童が主体的に人物との出会いを求めようとする実践でした。

参加者からは実践に基づく意見や質問が多く出され、充実した会になりました。今後も広く参加を呼びかけ入会につなげる試みを継続していく予定です。

授業の様子

このビデオは大会協賛の県東部小学校教育研究会の研修会でも活用していただきました。

令和5年度は、次の内容で対面開催する予定です。

○大会主題：「子供が発奮する道徳授業を考える」
○期日：令和5年8月8日（火）
○会場：ハワイアロハホール（鳥取県東伯郡湯梨浜町はわい長瀬五八四）
○日程：
①公開授業・授業検討会
②模擬授業：北川沙織先生（名古屋市立植田東小学校教頭）
③講演：鈴木中人先生（いのちをバトンタッチする会代表）

また、本支部の特色ある取組である「師道塾」を毎月開催しています。講師の竹内善一先生を囲んで古典等を読み、感想や疑問点を出し合いながら人物の生き方に学ぶ道徳教育の重要性を確認したり、参加者自身が人生観や教育観を振り返る機会となったりしています。この会には、若い教員の参加もあり、貴重な学びの場となっています。

最後に、本支部のサイトをリニューアルしましたのでお知らせします。研究大会などの本支部の取組等を掲載していきます。

(https://sites.google.com/view/toridoken/)

（前田 哲雄）

四国支部

「四国は一つ」を合言葉として、七條正典支部長のもと愛媛、香川、徳島、高知の四県が連携・協力して支部活動に取り組んでいます。各県を開催地として年に2回行っている学習会では、実践報告や講演、語り合いなどが企画され、道徳教育の実践を交流したり、見識を深めたりする貴重な機会となっています。

令和4年度は、第1回の学習会が8月6日（土）にオンラインと対面を併用して香川県で開催されました。「校内研修の充実」をテーマに行われた本会には、約80名の参加者があり、各県からの提案などを通して互いに学び合いました。会では、研修において「相互に学び合うこと」は、目の前にいる子どもに還元するためであり、そのために、ICTや思考ツールを活用したり模擬授業を通して体験的に学んだりして研修会を工夫していくことの重要性が確認されました。

第2回の学習会は、12月25日（日）に高知県で対面開催され、約60名の方に参加いただきました。「道徳科の学びの充実に向けて」をテーマとして高知県からは授業映像の公開、愛媛、香川、徳島からは、実践報告がなされました。それぞれの取組のアプローチは多様でしたが、どの実践においても、子どもたちが安心して自分の考えを伝え合える学級経営が根底にありました。当日の七條支部長の講演でも、「子どもに『向き合う』から『寄り添う』へ」という言葉を示していただきましたが、人の心を扱う道徳科の特性を考えると、子どもたちの思いの方向を子どもの立場に立って見つめてみるという教師の姿勢は、授業実践や校内研修など、どの場面においても欠かすことはできないものだとあらためて考えさせられました。

七條支部長による講演

支部では、このほか、実践や研究をまとめた機関誌『道徳教育の実践と研究』も発行しており、コロナ禍でも交流を絶やすことのないように工夫して活動を行ってきたところです。

こうした四国支部の活動の特長は、なんといっても「四国は一つ」の言葉が示すように連携した体制にあります。道徳教育の充実のために互いに協力し交流し合う、この連携を基盤として令和5年度は、徳島県と愛媛県を会場として学習会を行う予定です。学習会などを通して「心に寄り添う」道徳科の授業づくりを一緒に学び合ってみませんか？

（森 有希）

■シリーズ日本の道徳教育への提言

道徳科をよりよいものにするために

門脇　大輔

日本道徳教育学会第一〇〇回記念大会では、「次世代」を担う研究者・実践者からの提言に登壇し、今後の道徳教育研究に必要なことについてお話させていただいた。本稿では、記念大会の提言内容と重なる部分もあるが、道徳教育の要である道徳科をよりよいものにしていくための提言をしたいと思う。

まず、現在の道徳教育研究において、授業方法については様々に研究が進んでいることを確認しておきたい。そのような研究が進んでいくことで、ねらいにせまるための効果的な手立てを講じることができるであろう。他方で、道徳授業以外の学校生活における子どもの心の育成についてはどのくらい目が向けられているのだろうか。普段から子どもの心の育成に尽力し、道徳授業においてより効果的な手立てを講じていくことではじめて、よりよい授業が実現されるのではないだろうか。

そのためには、まずもって道徳授業のみしか見えないような狭い視野をもつのではなく、もっと広い視野をもち、道徳授業以外の教育活動へ目を向ける必要があると考える。なぜならば、道徳授業において子どもたちが道徳性を養っていくためには、感情のこもった言葉によって話し合うことが不可欠だからである。例えば、一見とても話合いが活発な授業であっても、子どもたちの言葉遊びに終始してしまうといったことはないだろうか。これは、たくさん話したけれど、何を学んだかが分からないといった状況である。子どもたちが納得解を得て、今日の学びが腑に落ちて分かるためには、感情のこもった言葉によって対話できるようにすることが重要である。そのために、道徳授業以外の教育活動へ目を向け、普段から感性を磨く取組をしておきたい。

感性を磨くための取組は多岐にわたるであろう。例えば、古典に触れる機会を設け、人の言動に着目する素地を養うことが考えられる。他にも、俳句を作るために、自然の中へ出かけていき、四季を感じることも考えられるだろう。このような取組は、体験的に人や自然とつながっている。そのため、道徳授業の際に、子どもたちは自分が体験したことをもとに、感情のこもった言葉で話し合うことが期待される。感性を磨くための取組は、教師の創意工夫次第で様々なものが実践できるであろう。もちろん、このような実践を行っていくためには、教師自身の感性も磨く必要があることを申し添えておきたい。

今後、全国の各教室において子どもも教師も感情のこもった言葉で対話をしていくことで、道徳科がよりよいものになっていくことを願っている。

（立正大学）

道徳教育研究室探訪　研究室編

国士舘大学　関根 明伸

海外の道徳教育への探究 - 韓国

1. 韓国の道徳教育のイメージ

韓国の道徳教育に関心を持って研究していることを話すと、よく聞かれる質問がある。

「韓国の道徳教育って、やっぱり儒教の精神が重視されているんですか。」

時代劇の韓流ドラマのワンシーンを思い出すまでもなく、約五百年続いた李氏朝鮮時代には朱子学が唯一の学問（官学）だったことから、今でも韓国の市民生活や道徳教育には儒教のイメージを重ねる人が少なくないようだ。だが、実際には儒教が特に重視されているということはない。宗教について言えば、最も信者数が多いのは意外にもキリスト教であり、韓国国民の約三分の一はクリスチャンである。

また、道徳教育（韓国では広義で「人性教育」という）が学校教育活動の全体を通じて行われていることや、道徳科が「要」（韓国では「核心教科」）であること、そして内容が四つの視点で整理されている点など、むしろわが国と多くの共通点が指摘される。ともに小中学校には道徳科が設置されており、日韓両国は、教科教育の道徳教育を実施している世界でも数少ない国家同士なのである。

2. 日本と韓国の道徳科

しかし、そもそも道徳教育が教科化された経緯や時期は、両国ではかなり異なっている。韓国では一九七三年に教科化されたのだが、冷戦時代の当時、道徳科には反共イデオロギーや国家主義的な思想が色濃く含まれていた。つまり、教科化は教化のための政治教育的な意味合いが強かったのである。ところが、この五〇年間において、韓国の道徳科は驚くほどの変貌を遂げてきた。たとえば、一九九七年からは情報倫理や生命倫理などの「現代的な課題」が登場したが、かつての主流だった「読み物教材」による徳目主義的な授業は影を潜め、現在は倫理学や心理学、法学や社会学など、他の様々な隣接学問分野の知見や成果を援用しながら展開していくテーマ型の学習が進められている。「現代的な課題」自体が複合的な知識や課題を含むため、道徳科には多様な接近方法や知識が求められるからだという。

一方、周知の通り、わが国の教科化は政治教育や教化が目的ではなく、現実的な実効性への要請が引き金となっていた。「いじめ問題」に起因する国民の世論が、教科化の大きな追い風になったことは記憶に新しい。教科化によって、生命倫理や情報モラル、いじめ問題等への現実的な対応は一層期待されていると言えるだろう。こうして見てみると、両国の道徳科は、ここにきてようやく目指すところが一致してきた感がある。

3．現代的な教科としての道徳科

ここで、現在の韓国の中学校教科書の「サイバー倫理と礼節」（2013）単元を例に見てみよう。

教科書は、「①サイバー空間の特性と道徳的責任」「②プライバシーの尊重と保護」「③サイバー空間で守るべき事」の三つの小単元から構成されている。①では最初にサイバー空間の特性について、「匿名性」「自律性」「多様性」「開放性」の観点から整理させ、インターネット自体は善でも悪でもなく使用者次第で功罪の両面性を持つことを理解させる。次に②では「読み物教材」が登場し、登場人物の心情や行動について話し合う。そして、最後の③ではグループで望ましい「ネット生活」の在り方を具体的に考えさせて閉じている。韓国の道徳科では、ステレオタイプの一時間一教材という枠にこだわらず、学際的で総合的な教科としての在り方が探究されているのである。

こうした韓国の道徳科の実践からは、文字通り先行事例としてわが国に示唆される点は少なくないだろう。だが、肝心なのは単なる導入や模倣ではなく、その発想や実践に学びながらも、あらためて道徳科を客観的に見つめ直し、改善策を探究していく大胆で柔軟な姿勢である。ある意味で両国の道徳科は、今後も時代とともに進化していくべき現代的な教科とでもいえるのではないだろうか。

論文執筆のための講座（第1回）

「なぜ論文執筆をするのか」

田沼　茂紀

研究委員会では、全国の会員各位からの要望を受け、令和3年度より編集委員会の協力を得つつ、オンラインによる「論文執筆セミナー」を開催しています。

既に二度開催しましたが、「これまでの取組を研究論文にしてまとめたい」とか、「実践成果を実践研究論文として残したい」といった皆様の声は、いずれも切実です。ただ、それをどのように論文として構想し、どう実際に執筆すればよいのかといった具体的な場面に及ぶと、「どうすれば？」と戸惑うことも少なくないようです。そのような会員の皆様の切なる声に耳を傾け、論文執筆の「はじめの一歩」を踏み出せるように背中を後押しするのがこの連載講座企画です。

一、書くべきことがあるから書く

第1回となる本講座では、手始めとして「なぜ論文を執筆するのか」という前提テーマから述べさせて頂きます。

とても気恥ずかしい限りですが、本講座担当者とて論文執筆のプロではありません。毎年論文に着手し始める季節になると、憂鬱になります。それまで取り組んできた研究テーマの深掘りがどこまで進んでいるのか、その内容は社会貢献として値することなのか等々を自問し始めると身が縮む思いがします。それでも勇気を振り絞り、執筆構想に取りかかります。ここで挫けてはいけません。

論者が先ず己に問いかけるのは、その研究によって何が明らかになり、論文化することでどのような社会貢献が可能になるのかという二点です。つまり、自己満足のための論文書き、書くことが目的化した論文ほどつまらぬものはありません。羅列された文字の中から研究者としての発想や着眼点、知見が得られる可能性に乏しいことが多いからです。

正直に我が事を吐露すれば、研究を志す者として、日々の成果を世に問うことを放棄するのはそれに携わる者としての矜持が許さないのです。ですから、学会誌や大学紀要等に毎年1本は必ず投稿するノルマを自らに課しているのです。

でも、執筆時は毎回苦しみます。「今年の論文テーマはこれで本当に大丈夫？」「この一年間で、どこまでテーマに迫る知見を得てきたのか？」等々、言い知れぬ不安に襲われて藻掻いてしまいます。もちろん、論文執筆は義務ではありません。例え書けなくても、誰からも咎められるわけではありません。だからこそ、辛いのです。この世界に身を置く限り付き纏う呪縛です。ならば論文執筆の悩みを少しでも軽減する方法はないものかと考えてみたのが、今回のテーマです。

二、第一歩は執筆構想を練り上げること

前置きが長くなってしまいましたが、読み手を失望させない有意味で、新たな知見を提供できる論文とするためには、その下準備として執筆構想に多くの時間を費やして幾度も自分の中で反芻することが何よりも大切かと考えます。

本講座担当者のことで語れば、こんな手順で論文執筆構想を固めていきます。

先ず取りかかるのは、日々取り組んでいる研究テーマについて「問題の所在」を鮮明にする作業です。なぜなら、問い無きところに解は存在しないからです。問いが明確になれば、それをどう追求して目指すべき結論を得ようとするのかという「研究目的」となるゴールが設定できます。次に、ゴールへどのように辿り着くのかという「研究方法」を柔軟な視点で考えます。凝り固まった発想からは、凝り固まった結論しか得られません。その論述を目にしただけで半ば結論が見えてしまうのは、読み手に失望を与えるだけです。研究方法が固まったら、それを解明するための道筋について「推論・仮説」を設けます。そうしないとただ闇雲に突き進むことになります。その推論や仮説を解明することこそ、「研究内容」そのものです。文献研究であれ、調査研究であれ、実証研究であれ、しっかりと先行研究を踏まえながら本研究で見いだした結果や結論を手掛かりに丁寧に論証し、自らの推論や仮説がどうであったのか考察していきます。最後にその研究で得た「全体考察」を述べますが、そこで大切なのは得た知見から新たに生じた「今後の課題」です。研究にゴールはありません。常に新たな課題が必ず立ちはだかるのです。

（國學院大學）

編集後記

令和5年度のスタートです。対面が増え、学会の活動がさらに活気づくことを願っています。会報の新シリーズも始まりました。今年度も、どうぞ宜しくお願いします。

（広報委員）